松村剛『中世フランス語辞書』の紹介 [1)]

2016 年 2 月 21 日、東京
ミシェル・ザンク

以下は３部構成で、第１部で或るエピソードを語り、それを途中で中断、第２部でもう一つのエピソードを語ります。これも終わりが無いので途中で中断し、第３部で前２者をまとめ結論とします。

15 年以上前、私にある一つの考えが浮かびました。それはリーヴル・ド・ポシュ Le Livre de poche の大判であるポショテック La Pochothèque 叢書に古・中フランス語の辞書を１冊で刊行するという考えです。

それには当時そのような辞書が存在していなかったという事情がありました。すべての中世研究者がゴッドフロワ Godefroy やトブレル–ロマッチ Tobler-Lommatzsch の辞書を自宅に所有するわけにはいかなかったし、これらの辞書は時代遅れになっていたことも否めませんでした。その頃から改訂されオンラインで提供された『アングロ・ノルマン語辞書』*Anglo-Norman Dictionary* ７分冊はその名が示す通りアングロ・ノルマン語の分野に限られていました。唯一の単冊辞書であるグレマス Greimas のそれは用途が限られほとんど役に立ちませんでした。

他方、私が 1988 年に始めたレットル・ゴティク Lettres gothiques 叢書はその頃隆盛をきわめ、兄弟叢書として 1992 年から始まったポショテック叢書の中に、ジュヌヴィエーヴ・アズノール Geneviève Hasenohr 女史と私が監修し改訂した『フランス文学辞典–中世編』*Dictionnaire des Lettres françaises-Le Moyen Age* が出ていました。これと対を成す中世フランス語辞典があってもいいのではないかと私は思いました。そうすればレットル・ゴティク叢書はこれら２つの辞書、文学辞典と言語辞典、によって強く裏打ちされたものになるでしょう。

レットル・ゴティク叢書が生まれた母体であるリーヴル・ド・ポシュの当時の責任者ドミニク・グー Dominique Goust 氏は著名な知識人であり、ラテン学者であると同時にそれ以上にギリシア学者で、出版界の重鎮であり、みなから尊敬されていました。従って彼のために一人の著者を見つければいいだけでした。そこで私は非常に優れた語彙学者であるジル・ロック Gilles Roques 氏のことをすぐに思いつきました。彼は承諾し、早速彼の編集方針と取捨選択方針の例として「A」の部分の数

語の原稿見本を私に送ってきました。その原稿は素晴らしく、用例は綿密に選択されており、記述は申し分ありませんでした。私は大喜びしました。ところがそれから何年経ってもその続きの原稿が送られて来なかったし、私からの手紙に対する返事も来なくなりました。ある日ポワティエで彼に会ったので、私は恐る恐る聞いてみました。何年くらいで原稿が完成するのだろうかと。彼は私に面と向かって軽蔑の笑みを浮かべ、このような仕事に期限などあるはずがない、と言いました。私は自分の無知と阿呆さ加減を思い知らされました。私はその時、この計画を諦めるか、別の著者を探すか、のどちらかしかないと思いました。

ここで私の第１のエピソードを中断します。第２のエピソードはそれよりずっと以前、30 年以上前に遡ります。その頃私はトゥールーズ大学で教鞭を取っていました。この甘美な街トゥールーズの中でも神々も人も心くつろぐル・ミライユ Le Mirail 大学に、ある日松村剛という名前の日本人学生がやって来ました。今や伝説的とも言えるかの国の人特有の礼節に加え、繊細さと控え目という個人的魅力を備えているだけでなく、彼のフランス語は完璧、研究方法は盤石で、文学に対する感受性と洞察力には目を見張るものがありました。私自身はどうしようもなく文学志向なので、彼を文学分野で指導しました。彼は『ばら物語』についての修士論文を提出しましたが、それはそれまでトゥールーズ大学のいかなる学生も出したことがないような素晴らしい論文でした。その後彼は帰国し、私の有害な影響から解放され、より堅実な研究へと向かいました。彼は中世研究者であり続けましたが、衒学的で曖昧な文学研究ではなく、より厳格な文献学の道へと進みました。彼はパリで学位論文を提出しました。それは『ジュルダン・ド・ブライユ』*Jourdain de Blaye* 12 音節版の校訂本で、非の打ち所のないものでした。彼は国立の東京大学で順調な経歴を積むと同時に、辞書学者として世界的に知られるようになりました。彼の研究は権威ある規範となり、『ロマン語研究』*Revue de linguistique romane* 誌上での詳細極まりない書評原稿は絶賛されると同時に、書評される側は戦々恐々です。

その間ずっと私と彼とは定期的にコンタクトを取り合っていました。そうでなかったら悲しい思いをしたかも知れませんが、その心配はまったくありませんでした。松村剛氏は誠実な人で、それほど恩義がない人に対しても礼儀正しさを忘れない人です。私は彼の学位論文の審査委員を務めました。そして、我々共通の大切な友人・故松原秀一氏が私を初めて日本に招待してくれた時、私は松村氏に東京で会いました。その際、多くの日本人研究者と知り合いになり、その後も長く交流が続いています。特に福本直之、原野昇、鈴木覺の３人の『狐物語』学者は松原氏とともに、

その２・３年後に京都、奈良をはじめとする多くの日本の魅力を私に発見させてくれました。[2] 余談ですが、私は怠け者で日本語を身につけませんでしたが、それでも私は日本の古代および現代文学や日本映画の魅力の虜になり、日本文化の繊細さに魅了されています。それは私の最初の日本訪問以来強まるばかりです。その後、ヨーロッパ中世初期がご専門の歴史学者・名古屋大学の佐藤彰一教授のご厚意で数度にわたり日本を訪問しましたが、そのときにもそれを強く感じました。

少し話が逸れ、個人的なことを話し過ぎましたので、第２部をここで止め、第３部に移ります。『中世フランス語辞書』の実現を望むなら、ジル・ロック氏の代わりの人を見つけなければなりませんでした。松村剛氏ではいけない理由があるでしょうか。彼は優れた語彙学者であり、ジル・ロック氏とは良好な関係にあるし、ロック氏も松村氏を高く評価しています。(そのこと自体が松村氏の優秀さを証明しています。というのもロック氏は滅多に人を褒めないからです。) 松村氏のみがロック氏の後を、しかもロック氏を傷つけないで、継ぐことができる人でした。こうして事が進み、辞書が刊行されるに至りました。

第３部は前二者に比して短く、これで終わりです。しかし私はその間の経過を跳ばしました。

まず、辞書というものがどのようにして実現されるのかということです。それはとてつもなく膨大な仕事であり、それをたった一人の人に依頼しようというのは、私ほどの無神経な者でなければ思いつかないことです。しかし幸運なことに私は怪物的とも言える才能と能力を備えた人を見つけることができたのです。彼は５年という信じ難いほどの短期間でそれをやってのけました。考えてもみてください、56,212 の見出語、3,500 ページ以上、文字数約 15,000,000 字という膨大な数です。この辞書はフランス語の起源から 15 世紀までを扱っており、適切かつ厳密に選ばれた用例が豊富で、語義は明晰、適正かつ正確で、語源、語の歴史、地域性についての説明も付されています。

辞書の中身の作成に５年、それの印刷・刊行に約２年かかりました。その間にドミニク・グー氏は定年退職し、彼の後を継いでリーヴル・ド・ポシュの責任者となった女性は、その余りの膨大さに驚愕し、前任者が交わした契約を破棄し、リーヴル・ド・ポシュを離れました。松村剛氏と私は原稿を抱え途方に暮れました。

しかし幸いなことにパリには、人文学分野で学問的に定評のあるベル・レットル Les Belles Lettres という出版社があります。同社は 100 年以上前に、有名なフランス語対訳付きギリシア・ラテン古典叢書、ビュデ叢書 Collection Budé というフランス

大学叢書を出すために生まれたものです。その後分野を拡げていきました。現在は、非常に精力的で優秀かつ包容力のある若きカロリーヌ・ノワロ Caroline Noirot 女史が率いており、出版事業が非常に厳しい状況にある今日にあって驚異的な業績をあげています。彼女は『中世フランス語辞書』の出版をすぐに引き受けてくれました。他方、私の同僚で友人でもあり、素晴らしい『中期フランス語辞書』*Dictionnaire du moyen français* の著者でもあるロベール・マルタン Robert Martin 氏が全ページの校閲を引き受けてくれました。こうしてすべてが非常に順調に進み、2015 年 11 月、この辞書は出版されました。これは本としても素晴らしいもので、表紙を初めとする装幀も美しく、上質の薄いインディアンペーパーが用いられているため分厚くなり過ぎておらず、レイアウト、活字体裁も詰まり過ぎでなく、読みやすいものとなっています。

これほど大部な本の製作には非常な費用がかかります。見積は大変高額なものでした。定価が手の届かないほど高くなる可能性がありました。それを避けるためには何らかの助成金が必要です。幸いなことにそれを得ることができました。というのもこの辞書は必要なもので、待ち望まれていたものであり、何よりも学術的に格別信頼できるものであったからです。公的機関である CNL（Centre National du Livre）が助成金を出してくれました。さらにコレージュ・ド・フランス Collège de France からも破格の助成金を得ることができました。このほかに 2007 年に私に授与されたバルザン賞 Prix Balzan の研究資金からも前者以上の多額の資金を投入しました。こうした努力の結果、定価を 85 ユーロに抑えることができました。もちろんこれでも安くはありませんが、これほど分厚い本としては受容し得る範囲の価格と言えるでしょう。幸い売れ行きの出足は順調で、特定分野に限定された高価な本にもかかわらず『中世フランス語辞書』は成功しています。

エピローグはおとぎ話のそれのように幸せに満ちています。原野昇氏のお蔭で、日本のすべてのフランス中世の専門家と松村剛氏の友人の研究者たちが、今日ここに彼の辞書出版を祝うために集まっています。参会者のみなさんに、私も心のなかではみなさんと共にいるということを知っていただきたいと思います。数日後には松村剛氏はフランスへ向けて出発するでしょう。コレージュ・ド・フランスに招待されて「国家の教授」chaire d'Etat（コレージュ・ド・フランスの公式招待者をこう呼びます）として、『中世フランス語辞書』の準備と編纂について 4 回の講義を行うためです。[3] 彼はまた碑文文芸アカデミーAcadémie des inscriptions et belles lettres においても同様の講演を行います。

以上の経過から私は一つの教訓を引き出します。それは我々の自慢です。学問的に新しい知見に基づいた独創的かつ非の打ち所のない唯一無二の辞書、それでいて個人が入手できるような１巻本のこの辞書が、一人の日本人学者の手になったということです。彼はそれをいくら誇りに思っても誇り過ぎではありません。著者は彼一人であり、責任者として私の名前が出ていますが、それは彼の寛容さ、律儀さ、友情の賜物であり、実際には私はほとんど何もしていません。松村剛氏は「松村辞書」le Matsumura—この辞書は今後こう呼ばれてたちまち古典的名著になるに間違いありません—を自分が成した辞書として誇りに思って当然です。一方、我々フランス人も我々の古語や古典がかくも遠く離れた国、しかも彼ら自身の言語と文学は非常に古く、輝かしく魅惑に満ち、彼ら自身が研究するに価する国において、これほどの興味・関心を引いたということを誇りに思います。[4] また日本も、中世フランス語も含むすべての分野においてかくも強靭な忍耐強い研究者を生み出し続けていることを誇りに思っていいと思います。

（原野　昇訳）

（訳者注）

1) 本稿は、2016 年 2 月 21 日に東京で開催された松村辞書出版祝賀会の参会者宛メッセージとして訳者に託された Michel ZINK, Présentation du *Dictionnaire du français médiéval* de Takeshi Matsumura, Paris, Les Belles Lettres, 2015； Tokyo, 21 février 2016.の翻訳である。

2) 2004 年 3 月に、日本学術振興会および科学研究費の助成金を得て、Michel Zink 氏を広島大学に招いて開催した国際研究集会”Colloque sur le vocabulaire de l’ancien français”終了後、松原秀一先生らと共に宮島、岩国のほか京都、奈良を案内した。

3) 松村剛氏は 2016 年 3 月に Collège de France において以下の４回の講演を行った。

3月3日　：Comment lire les dictionnaires du français médiéval ?

3月10日：Sur le caractère régional du vocabulaire

3月17日：En cherchant des attestations charnières

3月24日：Pour sortir des sentiers battus

4) 同辞書は早速 Académie Française から 2016 年度の Grand Prix de la Francophonie を授与された。